石炭分離は決定的？

西日本新聞が具体的内容を報道

CO患者の放棄は確実
三井、収奪拡大ねらう

去る二十六日の〝西日本新聞〟の朝刊は、かねてから取沙汰されていた、三井鉱山からの〝石炭部門〟の分離が、今や決定的なものとなったことを伝え、大きな波紋を投じたが、記事の内容を見るにつけても、全CO患者の放棄、一般労働条件のひき下げなどが、同分離が労働者にとってはかり知れぬほどの重大問題となってくることは確実で、三池労組はまたしても重大な決意をせまられることになるだろう。

記事の具体的内容

重大問題を提起した西日本新聞の同記事のなかから、とくに考えられる点を抜すいすれば次の通りである。

――三井鉱山（倉田興人社長）は、石炭分離の方針を固めた。

――石炭分離後は、①石炭の販売、コークス生産などの石炭関連部門、②建材、セメントなどの建材部門、③不動産部門を中心に再建する方針で、同時に、関連会社や子会社の吸収、再編成を積極的に進める。これにより、わが国最大の炭鉱規模を誇ってきた三井鉱山は、採炭部門から完全に手をひき、石炭販売を含めた管理・販売会社として新発足することになる。

――同社が石炭部門分離の方針を固めたのは、①第五次石炭答申で年産二千万トン体制が打ち出され、石炭の縮小撤退路線が明確になった、②各鉱を分離することによって政府の石炭政策に応じやすい条件を整えるとともに〝脱石炭〟による同社の再建計画がたやすくなる、③二千万トン後に予想される石炭業界の再編問題に弾力的に対応する準備ができる――などによる。

――分離の仕方については、三池、芦別、砂川三鉱を一社とする三山一社方式、三池と芦別・砂川を各一社とする地域別二社方式、それぞれの炭鉱を単独で一社とする一山一社方式などを検討しているが、同社は、①二千トン体制に予想される業界の再編成では、資本別の再編成が進められる見通しが強い、②第五次石炭答申による、二千万トン体制後に補助金を〝山元格差配分〟する考えが示されており、一山一社の体制をとる方が有利とみており、三池、芦別、砂川の各鉱を単独で新会社とする可能性が強い。

――石炭分離後の三井鉱山は、石炭関連部門、不動産部門、建材部門を三本の柱に、関連会社、子会社の再編成、統合を積極的に進める方針。石炭関連では、石炭販売のほか、三井鉱山コークス、三池コークスなどの再編成、不動産部門では、三井三池開発、三井土地建物などを軸とした不動産管理、販売、観光部門への進出など業務の充実、拡大、建材部門では三井セメントとの提携強化などを検討している。不動産、観光部門については、三井系の北海道炭鉱などとの提携強化も検討している。

――通産省は同社の石炭分離が実現すれば、二千万トン体制の維持、強化が進められやすくなるとして、分離を歓迎しており、できるだけ早い時機、石炭鉱業審議会体制部会で本格的に石炭業界全体の体制問題を論議する方針。

抜すいは以上の通りであるが、ねらいはいっそうの收奪の拡大であり、三池労組としては右の記事を重大問題視し、場合によって抗議行動を起こすことも考えている。

一般に大きな波紋を投げかけた西日本新聞の一面。

主張

改めて平和闘争の先頭に立つ覚悟を

今年も、八月を迎えました。真夏のギラギラ輝く太陽を仰ぎ見ながら、戦争の悲惨な思い出を語り合い、平和への願いを新たにする時季です。

資本主義のもつ矛盾は、民族を滅亡させる戦争への道を進まざるを得ない必然性をもっています。

第二次世界大戦は多くの人民を殺害し、都市や村々を破壊しつくし、科学の発達は、皆殺し兵器の原子爆弾さえつくり出し、人間が人間を、一秒も早く、一人でも多く殺す将軍を英雄とする思想をつくりあげ、とかく戦争行為を美化する考えを広げ、それによって私たち日本人は一億玉砕の決意を強制され、天皇のために死ぬことを誇りとすることを義務づけられてきました。あの時の軍靴の足音がまた聞えてくる気が致します。

戦争は今も続けられています。ベトナムにおけるアメリカ帝国主義者の侵略。無差別北爆は続けられ、ベトナム人民が毎日殺りくされています。

しかし南ベトナムにおける解放戦線の軍事的攻勢は、かいらい軍とアメリカ軍を圧倒し、インドネシャの全域の解放も、いよいよ時間の問題となっています。アメリカにおける大統領予備選挙で、民主党で、マクガバンが圧倒的多数の支持を集めて、民主党の大統領候補となり得たのも、「ベトナム戦争の早期終結」の公約を掲げたところにあったと思います。

自民党内には、平和憲法を改悪する動きさえ露骨に出ていて、かっての帝国主義体制の確立と、戦争への傾斜を深めています。

以上の情勢のなかですすめている、私たちの反戦平和の闘いは、終戦後二十七年を迎えますますマンネリ化におちいってゆくように思われてなりません。

いったい、私たちがすすめている反戦平和の課題は何なのか、運動はどう推進してゆくべきか、この際真剣に考えて見る必要があると思います。

今では、独占資本や反動自民党政府さえ、平和を口にし、戦争反対を叫んでいます。今こそ、彼らのそれと、私たちのすすめている反戦平和の闘争の違いを明確にしてゆかなければなりません。彼らの主張の裏のたくらみをあばき、さらには、反安保・基地撤去を要求する闘いでもあるのです。

また日中国交回復や日朝国交回復の闘いは、平和へのかけ橋となり、以上のような闘いに向け、今こそ労働者階級が先頭に立ち、国民世論を結集し、積極的に行動を取り組むことが絶対必要なことです。

「いかなる国の核兵器にも反対する」ことを基調に、長く闘ってきた原水禁運動や一連の反戦平和の闘争を、命と暮らしを守るための権利を要求する、職場・地域での闘いと結合して闘うときこそ、平和もまた保障されるものだということを信じて疑いません。

キャラバン隊通過
〝原爆の火〟かざし

〝被爆二十七周年原水爆禁止世界大会、長崎大会〟をめざして行進を続ける〝九州縦断原爆被爆者キャラバン隊〟が、炎天にもめげず大牟田を通過した。

一行は沖縄県代表の丸茂つるさん（沖縄県被爆者協議会常任理事）と石原愛子さん（被爆者。いずれも那覇市）に長崎の被爆二世といわれる浜口広樹さんの三人。

キャラバン隊は三十日に熊本県下をキャラバン後大牟田にはいり翌三十一日朝同市の市役所前で平和集会後、約五十人にふくれあがり、めざす柳川市に向け出発していった。今後五日間にわたって福岡県内をキャラバンの後、長崎にはいる計画。

行進の先頭には、実は八女郡星野村に二十七年間にわたって燃え続けている広島の原爆の火（長崎の火といわれているのは誤り。当時広島で被爆した同村出身の山本さんという人が、防空壕のなかで燃えていた原爆の火をもち帰り、燃やし続けてきていた火）を灯した提灯が高だかと掲げられ、注目を集めていた。

なお大牟田被爆者代表の河野愛子さんの「今もこの火は私たちの体内に燃えつづけ、子どもから孫へと燃えつづけてゆくだろう。私はこの火を落し、ベトナムを侵略しているアメリカを憎む」との訴えが、胸につきささった。

連載小説

或る報復

三川岡浦益実

(4)

そのころ、諜が働いている炭坑でも暴動があった。切賃問題に端を発し、採炭夫を中心に起った。九月初旬のことである。

長年にわたって、圧制と搾取に耐えてきた坑夫のフンマンが爆発したものであるが、組織だった行動に至らず暴動に終った。久留米師団より歩兵一個大隊が鎮圧に駆けつけた、いわゆる万田坑大暴動である。

百姓から炭坑夫になったばかりの諜は、母と妻と、前年生まれた長女の時枝を抱えて、なすすべを知らず傍観するだけであった。

それから数年の後、四人目の子強一が生まれ、そして妻に死なれた。妻が息をひきとったのは大みそかの夜だった。戸外には肌を刺すような北風が吹いていた。

強一が生まれる直前の大正十三年六月、鉱業所とその関連工場が連合ストライキに突入した。

賃上げと労務政策の一環として会社がつくった共愛組合の撤廃が主な要求であるが、製作所を中核として、炭坑や鞏業所の労働者がこれに呼応し、一ケ月にわたって争議は行なわれた。

諜は、このストライキに参加していない。製作所、染料工業所に続いて炭坑が罷業団を結成した当時、妻はいつ陣痛が訪れるか判らない腹をつき出していた。それに三人の子供と母の生活もかかっている。

しかし、そのことがストに参加しなかった理由の全部ではない。首になって放り出されはしないかとおそれたのだ。社宅の中では労務の息のかかった警戒人が目を光らせていた。それがこわかった。会社に楯ついたらどうなるか心配だった。諜は、スト参加者に済まない気持で就労を続けた。

経済不況はその後も治らず、昭和二年に金融恐慌が起った。企業倒産や合併が相次ぎ、三年には産業合理化が進行し、労働争議が活発になった。治安維持法が改悪され、特高が設置された。

翌四年、世界大恐慌の影響が深刻化し、失業者が続出した。産業合理化政策は益々進み、昭和五年には大不景気の波が押し寄せ、おびただしい失業者が巷に溢れた。また、浜口首相が狙撃されたのもこの年である。

諜が炭坑にきてからすでに十三年の歳月が流れていた。不況の嵐が吹き荒れ、いつ首がとぶか判らぬ不安の日々を送っていた。

昭和五年には、実に三池炭鉱の在籍者の三十四パーセントに当る三千数百名が解雇された。情容赦のない一方的な首切りだった。諜はどうにか失業をのがれ、家族と肩を寄せ合って生きてきた。

坑内でも一番骨の折れる採炭夫として働いていた。高温多湿で、その上危険な現場での労働は、諜をボロ屑のように疲れさせた。

しかし諜は精勤した。家族六人の生活を支えるには、いくら疲れていても精勤するほかなかった。

母のクラが家事と四人の孫の面倒をみてきた。

細々とではあったが、働き者の諜を柱に六人の家族は仲よく暮らしていた。